

福田さんの思い出

中野 雄二

私が福田さんとお会いして直接お話ししたのは、長崎市内で開催された研修会やヒアリング、その後の懇親会であり、回数は年に2・3回程度であった。それから考えると、私と福田さんとの総出会い数は20～30回ほどとなり、ここで執筆されている他の方々と比べると非常に少ないかもしれない。だが、少ない時間であるものの、私にとって福田さんは強い印象を残した方であった。

私が吐露した行政事務や考古学に係わる様々な迷いに対して、とくに懇親会の中などで、熱く真剣に教示というか叱責いただいたこと。逆に、福田さんが私に、或るやきものに関する質問をされた際には、かなり細かいところまで熱心に問われ続けたこと…。いつしか私の中では、福田さんは「熱い男」という印象ができあがっていた。

福田さんがお亡くなりになる年、たぶん、ほぼ最後の会話だったと思う。福田さんがこう言われた。「中野くん。文書の波佐見町の教育長名を見て気づいたんだけど、教育長さんは、私が小学生の時の先生だよ。先生が曲を作って、みんなで歌った時は楽しかったな～。先生お元気？」と。その時、福田さんが大きい目を細め、視線を空に向けて、本当に懐かしそうに語っていたことが今も深く心に残っている。福田さんのまなざしの先には、嬉々として歌う小学生の頃の自分の姿があったのだろう。熱い男が語る熱い感傷、それが今生最後に触れた福田さんの姿となってしまった。

福田さん。教育長はお元気です。曲を作ったことも、当時の学校や子供達のこともしっかりと覚えていらっしゃいました。このことを残念ながら生前にお伝えできませんでしたが、今、この場を借りてご報告させていただきます。